

テニス部顧問の思い出

臺 三代 先生



昭和二十五年の春、千歳高校に初めて女子五十名が九期生として入学した。新任女教師第一号として赴任した私は、間もなく女子テニス部の顧問を仰せつかり、以後、五十九年三月に退職するまで三十有余年にわたって長く顧問をつとめた。その間、大してお役にたったと思えないが、私の胸には数々の思い出が深く刻みこまれている。



顧問にはなったものの、あの幻と消えた東京オリンピックを目指して、小学校低学年からずっと陸上競技（百米）に専念してきた私は、テニスに関して全くの素人であった。しかし、放課後ベテランの先生方の手ほどきを受け、また千葉や日光の夏の合宿で素晴らし

い腕前のOBの皆さんに接して、だんだんとその魅力にとりつかれていったのである。

暑い暑い千葉の合宿、若かった私は男子顧問の山崎先生とともに早朝のかけ足から参加し、前衛練習も生徒の列に混じって一生懸命やり、最終日の紅白試合にも出してもらった。上手な三年生は実に打ちやすい玉を返してくれ、必ず負けてくれたが、二年生とは勝ったり負けたり、一年生には勝てるという程の腕前であった。女生徒が熱を出すと、夜通し冷やし続けて看病し、また男子生徒がひどい下痢の時はお粥を作って運んだりした。

日光の合宿の頃、乳幼児をかかえていた私は後半に参加した。丁度昼休みで松の木陰で休息していた女生徒のひとり、私の姿を見つけるや否や、「ウァーお母さんが来たア」とポロポロ泣きながら小走りで近付いて来た。

あ、来て良かったとしみじみ思ったが、あの思い出は終生忘れ得ぬことである。

私はどの合宿に参加したときも、宿に着くと必ずすぐ台所に行ってその清潔の度合いを眺め廻した。食事時にはその栄養量をさっと頭の中で計算し、不足するものがあるとすぐ

「明日の献立にはこの食品を追加して下さい」などと、たのんだこともしばしばであった。また夜半に疲れて物凄く寝相の子のお布団をそっとかけ直して廻ったりもした。強いOBに厳しく鍛えられた女子の中からも、だんだんに関東大会や全日本に出場するペアが出て来た。

次に対外試合。ひところの千歳は、都立で五本の指に入る迄に強かった。八回戦進行き、あと一本でインターハイに出られたのに一球に泣いたくやしかった思い出。また凍えそうに寒かった千駄ヶ谷の体育館に和服を着て応援に行ったとき、遂に私立のトップを倒して「インドア優勝」の輝かしい記録を打ち立てた、二十期のおチビさん揃いの人達の喜びの表情を、まるで昨日のことのように思い出す。

私は試合の応援によく手作りのサンドイッチやお菓子、果物などを持って出かけた。とくにうちの三男が四、五才の頃はよく応援につれていったが、得意の切り紙で『勝つ怪物』を作り、選手の鉢巻きや胸ポケットにお守りとして入れさせてコートへ送り出した。しかし、試合に負けるとおいおい泣くので、子供

心にその印象が強く残ったせいかな、彼はどんなにすすめてもテニスをやろうとせず、高校では卓球部に入ってしまった。またゴールデンウィークの頃の大会で、どんどん勝ち進んでしまい、休日はすべて応援といつては出かける私に、主人は「たまには家に居ろ」と怒ったりした。

しかし、時とともに顧問としての仕事も変化していった。一面しかないコートを何とか以前のように三面に増やしたいと思い、ある年に共通点の多い都立高校数十校のコート数、

部員数、向き（南北コートか否か）などを調べて表にまとめ、顧問会議に提出したこともあった。だがなかなか思うようにはいかなかった。



千歳高校テニス部に関する思い出はつきない。そして近頃の私は、ウィンブルドンを始め世界の一流プレーヤーたちの競う国際試合を夜半迄テレビで観戦して興奮している。かつて対外試合の応援に声を嗷らしたように！

